



TITLE:

明と琉球との関係について

AUTHOR(S):

三國谷, 宏

---

CITATION:

三國谷, 宏. 明と琉球との関係について. 東洋史研究 1938, 3(3): 165-183

ISSUE DATE:

1938-02-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/145611>

RIGHT:

# 東洋史研究

第三卷  
第三號

昭和十三年二月發行

## 明と琉球との關係について

三國谷 宏

洪武五年 (1372 A. D.) 明の太祖行人楊載を遣して琉球を招撫せしめ、同年琉球國中山王察度は弟泰期を派して明に入貢せしめた。明と琉球との公の交渉は此時に始まり、茲に琉球が明の朝貢國たる政治的關係が結ばれた。一方琉球はまた古くより日本と交渉あり、後述の如く日本に對しても從屬的な政治的關係を結んでゐたと思はれる。足利幕府衰亡後暫く日本との關係は中絶してゐたやうであるが、慶長十四年 (1609 A. D.) 島津氏が大舉して琉球を征服しその王尙寧を擒にして薩摩に伴ひ還り、爾來琉球は島津氏の支配を受け事實上の領土となつた。然かも明との關係には變更なく、明朝覆滅後は引續き清朝の朝貢國となり依然薩摩に服屬した。この兩屬の關係は明治初期琉球が完全に日本の一縣となるまで繼續してゐる。今便宜上日琉關係と切離して先づ明琉關係を考へ、ついで日琉關係を見ることとする。

① 楊載派使を洪武二年とする説もあるが、明らかに誤である。中山世鑑、武藤長平著西南文運史論所收『琉球の史的管見』

明の太祖が中國を平定するや四方に使臣を派して威を中外に輝かし版圖の廣大を誇つた。琉球に對しても洪武五年楊載を遣して招撫せしめた。琉球國中山王察度はこれに應じて直ちに奉期を派して入貢せしめた。かくて明に對する琉球の朝貢關係は始まつた。當時琉球に於ては中山・山南・山北の三山鼎立し抗争して居り、中山は最も優勢であつた。察度が直ちに明の招撫に應じたについてはこの三山分立抗争の状態にあつて明と關係を結ぶことによつて更に有利の地位を占めんとしたことも一因と考へられる。洪武十六年(1383 A.D.)太祖は内使監承梁民及び尙佩監奉御路謙を遣して三山相抗争するを止めよとの詔を齎らし、同時に鍍金銀印を賜予せしめた。この鍍金銀印とは如何なるものであつたかといふに『中山世鑑』に「鍍金銀印と申すは爾來代々國王の御寶物と成て大明や日本などへ往來の表文に押す金印是也」とあり、後のことではあるが『皇朝文獻通考』に「賜以鍍金銀印、文曰琉球國王」とある。明らかに國王の印璽である。<sup>①</sup>さきの楊載の招撫を以て直ちに琉球國王の冊封なりとする説もあるが、詔諭に琉球國王乃至中山王の文字もなく冊封の儀式は勿論なかつたから必ずしも冊封と爲し難い。鍍金銀印が國王の印璽である以上寧ろこの印璽賜予を以て事實上の冊封と見る方が妥當であらう。察度の子武寧の時に至つて冊封の儀禮が行はれ、冊封の制が成立した。即ち永樂元年(1403 A.D.)中山王世子武寧は姪三吾良璽を遣して入貢し、成祖の即位を慶賀し父察度の計を告げ襲封を請はしめた。三吾良璽等が京師に到つて使命を果たしたのは翌二年で、同年二月二十一日成祖は行人時中を遣して察度の諭祭武寧の冊封を爲さしむとの上諭を發した。此時初めて先王の諭祭新王の冊封の儀禮が爲された。これを以て冊封の始と爲す説もある。<sup>④</sup>爾來王

の更替する毎に明朝に報じて新王の襲封を請ひ、明朝は冊封使を派して諭祭・冊封を行はしめた。但だ尙圓王統第二代目の尙宣威の時のみはその在位僅に六個月にして尙眞に位を譲つたから、請封・冊封共に行はれなかつた。然して明代に琉球の王統三度更替し、察度の統は思紹によつて、思紹の統は尙圓によつてとつて代られたが其都度王統更替の事實を告げず先王の後嗣として冊封を受けてゐる。恐らく明朝の忌諱に觸れんことを避けたのであらう。

尙永薨じ尙寧位を嗣いだ際、即ち萬曆二十三年(1595 A. D.)琉球使臣于瀾等が世子尙寧の爲に襲封を請ふたが、明朝に於てはその手續の不備を指摘して世子の表文を具備して襲封を請ふべしと爲し、同二十八年(1600 A. D.)世子尙寧の請封を俟つて三十三年(1605 A. D.)冊封使を派遣したことがある。<sup>⑤</sup>

冊封使は初め正使一人であつたが正統七年(1442 A. D.)給事中余忬が正使、行人劉遜が副使として任命されて以來常に給事中が正使、行人が副使に任命さるゝことゝなつた。

慶長十四年即ち萬曆三十七年(1609 A. D.)後述の如く島津氏が大舉して琉球を征服して以來琉球は薩摩の支配を受けることゝなつたが、明への從屬關係は依然繼續した。尙寧歿するやその子尙豊は天啓二年(1622 A. D.)王舅毛鳳儀等を遣して進貢し、尙寧の計を報じて襲封を請ひ、明は滅亡前の騷然たる國情にも拘らず崇禎六年(1633 A. D.)戸科左給事中杜三策、行人司行人楊掄を遣して諭祭・冊封を行はしめてゐる。ついで崇禎十四年(1641 A. D.)尙賢位に即き、同十七年(1644 A. D.)金應元を遣して襲封を請はしめた。恰も此年清の世祖山海關を撃破つて北京に入り、毅宗は自殺して居る。然しなほ福王は給事中陳燕翼行人韓元勳を遣して冊封せしめんとしたが遂に實現しなかつた。弘光中福王は福州左衛指揮花恩を琉球に遣して登極の事を告げしめ、尙賢は毛大



用等を遣して慶賀せしめた。翌年唐王は指揮閩邦基を琉球に派して即位を告げ、尙賢は毛泰久をして慶賀せしめて居る。毛泰久等使事を竣つて歸國の途につき琅嶠地方に到つた。恰もその時清軍は唐王を捕へ鄭子龍等は清軍に降伏した。毛泰久に隨伴してゐた長史金思義等は福州に到つて清將に謁し投誠の事を申述べた。一方琅嶠地方にも人を派して毛泰久等を福州に伴ひ來らしめんとしたが、毛泰久等の一行は海賊に襲はれ辛うじて生命を完うして福州に來つた。かくして毛泰久等は清將に従つて北京に赴き清朝に服事せんことを請ひ、清朝は通事謝必振を琉球に派して招諭し、茲に琉球は清朝の朝貢國となるに至つた。<sup>⑥</sup>

以上は明朝の琉球中山に對する冊封關係の概略であるが、尙巴志の三山統一前明の山南山北に對する冊封關係は如何であつたか。

太祖が洪武五年中山を招撫し、中山が直ちに入貢したことは前述の通で、その際山南・山北亦入貢したとする説がある。<sup>⑦</sup>然し『皇明實錄』『明史』『明史藁』其他信憑すべき史料にはそのことが見えない。當時太祖が琉球の三山鼎立の状態を知つてゐて三山共に招撫せしめたとは思へないし、山南・山北と敵對關係にあり明と政治的經濟的關係を結ぶことによつて山南・山北より有利な立場に立つと考へられる中山が山南・山北を懲撫する筈もなく、同時に入貢したと考へるよりしなかつたと考へる方が妥當であらう。然らば何時入貢したか。『明史』『明史藁』琉球傳には「九年夏泰期隨(李)浩入貢<sup>中略</sup>明年遣使<sup>中略</sup>又明年復貢、其山南王承察度亦遣使朝貢」とある。即ち十一年(1378 A. D.)となる。然るに『皇明實錄』には十一年山南王朝貢の記事は見えず、十二年(1380 A. D.)十月二十日の條に山南王が師惹を遣して入貢し方物を獻じ、王に大統曆、金織文綺を賜り師惹等にも亦文綺、鈔を賜予したとある。琉球側の史料たる『球陽』には洪武十六年となつて居り「山南入貢自此而始」と註記して

ある。『明史』『明史彙』には十三年入貢の記事はない。恐らく『皇明實錄』の記事を信すべきであらうと思ふが十一年十三年の何れとも決定すべき材料がない。山北王帕尼芝の入貢は洪武十六年(1383 A.D.)に始まつて居る。

洪武十八年(1385 A.D.)中山進貢し山南・山北亦入貢し、太祖は山南王・山北王の使臣に鍍金銀印各一を賜予した。かくて山南王・山北王亦事實上明朝の冊封を受けた譯である。永樂元年(1403 A.D.)山南王承察度歿し従弟汪應祖位に即き、隗谷結制等を遣して先王の訃を告げ新王の襲封を請はしめた。同二年成祖は使臣を派して諭祭冊封を行はしめた。永樂十二年(1414 A.D.)汪應祖は兄達勃期に弑せられ、その子他魯每推戴されて位に即き、翌年成祖は行人陳季芳をして冊封せしめた。宣德四年(1429 A.D.)他魯每は中山王尙巴志の爲に滅ぼされ山南は中山に併合さるゝに至つた。

山北は帕尼芝の後樊安知が繼いだが、明朝の冊封を受けたか否か明らかにしがたい。山北は三山中勢力最も微弱で入貢も最少なかつたし、樊安知冊封を示す記事は一つもなく、或は冊封されなかつたのかも知れない。樊安知は永樂十四年(1416 A.D.)尙巴志によつて滅ぼされ、山北は中山に併合された。

- ① 當時三山鼎立の状態であつたから、想像を逞しうすれば印璽の文は「琉球國中山王之印」とあつたであらう。尙巴志以前は固よりその後も『皇明實錄』に見ゆる琉球國王は殆ど皆琉球國中山王の稱號で記されてゐる。なほ尙金福薨去後王位繼承の爭あり、府庫燒燬されて鍍金銀印亦鎔壞し、景泰五年掌國事王弟尙泰久はその再賜與を願ひ許可された。
- ② 眞境名安興島倉龍治共著『沖繩一千年史』
- ③ 察度は洪武二十八年(1395 A.D.)に歿し、武寧は翌年位を嗣いだが何故か此時まで訃を告げず、襲封を請ふてゐない。この遣使は同時に成祖即位の慶賀使でもあつた。

## ④ 『球陽』『西南文運史論』

⑤ 當時明は豊臣秀吉の朝鮮征伐のため甚大な脅威を感じてゐた。二十九年に冊封のことは決せられたが準備等の爲三十三年まで遅延した。

⑥ 『皇朝文獻通考』『福建通志』にも金應元派使のこと及び琉球が清朝に歸屬するまでの顛末を記してあるが、毛泰久と金應元とを混同して同一人の如く述べてある。『清朝實錄』『清史稿』等にも記載がある。

## ⑦ 『皇明世法錄』『殊域周咨錄』『中山世鑑』『琉球入學見聞錄』

## III

洪武五年太祖の招撫に應じて中山王察度が泰期等を派して明に入貢したことは前述の如くで、爾來明治初期に至るまで明に對する琉球の朝貢は續けられた。洪武二十五年(1392 A.D.)太祖は閩人三十六姓を琉球に賜與しその書を知る者には太夫・長史を授けて貢謝の司と爲し、航海に習ふ者には通事・總管を與へて航海の指南を爲さしめた。<sup>①</sup>これら三十六姓の閩人は或は年老いて國に歸り、或は留るも嗣なく、次第に減少して萬曆三十五年(1607 A.D.)に復た阮・毛二姓を賜つたといふ。<sup>②</sup>乾隆二十九年(1764 A.D.)の序文ある『琉球入學見聞錄』には「今止存金梁鄭林蔡五姓」と記してある。武藤長平氏は『西南文運史論』所收「琉球群島通商沿革小志」の中に氏自身の調査せし所によれば鄭蔡梁金林程王の七姓なりと言つて居られる。恐らく後に移住したものであらう。彼等は久米村に住着き専ら對支交渉の任に當つた。

宣德十年(1435 A.D.)に至つて「沿途疲于供給」を理由として禮部尙書胡濙が進貢正副使及び從人の入京人數を二十名に限定せんことを奏請し、以後二十名が入京を許され他は泉州後に福州の琉球館に滯留することゝなつた。<sup>③</sup>

洪武五年以來成化八年(1472 A. D.)に至るまで琉球の入貢は不時で貢期の定めなく、一年二貢三貢甚だしきは五回入貢したこともあるが、進貢使隨員等が福州に於て殺人強盜等の暴行を爲した爲に同十一年(1475 A. D.)奸弊を除くを理由として二年一貢の制が定められた。<sup>④</sup>蓋し明朝としては何等實益なく恩惠的に朝貢を許したのであるから、これを好機として煩を避ける爲入貢を制限したのであらう。爾來琉球は屢々一年一貢を請願し、弘治元年(1488 A. D.)の如き浙江より入貢して二年一貢の例に違ひ貢路亦正路に非ずとして却けられんとし、漸く従人に對する給與を常例の半として裁抑の意を示された上で入貢を許されてゐる。爾後概ね二年に一回入貢してゐる。弘治三年(1490 A. D.)には琉球王尙眞の奏請により入京人員を五名増加し、また滯留人員の口糧二十名分増給されることゝなつた。琉球は反復毎歲一貢を請ひ、正徳二年(1607 A. D.)三月尙眞の毎歲一貢の要請に對して禮部は「比以入貢遇遠期限、乃爲此奏、以飾其非」として却くべきを覆奏したが、武宗は特に「如舊歲一入貢」を許し、こゝに再び一年一貢となつた。然るに世宗即位するや嘉靖元年(1522 A. D.)には再び二年一貢、每船百五十名を過ぐるを得ざるべきことゝ決定されてゐる。

萬曆三十七年(1609 A. D.)琉球史上最も重大な事件が起つた。即ち薩摩の島津氏の琉球征伐である。これについては後に述べるが、琉球は三十八年七月島津氏の征琉を急報し、貢期を緩うせんことを請うた。然るに島津氏は琉球をして敢て明との交を繼續せしめ、明琉關係は依然變ることなく維持された。此時に當つて明朝の態度は如何であつたか。是より先き萬曆二十年(1592 A. D.)及び二十五年の豊臣秀吉の朝鮮征伐は、それまでも屢屢倭寇によつて惱まされてゐた明朝に對して重大なる脅威を與へたことはいふまでもない。萬曆二十年以來『皇明實錄』に日本に備ふべしとの記事が頻出するによつても明らかである。琉球が日本の島津氏によつて征服され

たことは更に脅威を増した。萬曆四十年（1612 A.D.）には禮部は遂に琉球の入貢について十年の後琉球の物力回復を俟つて進貢せしむることとして體面を維持し、此度の貢物は日本産のものは持歸らしめ一方海防を嚴にすべしと覆奏するに至つた。蓋し琉球の背後に日本の脅威を感じたのである。またこれを以て十年一貢と定めたといふ説があるが十年一貢と定めたといふ譯ではなく唯だまづ十年の後を俟つて入貢すべしと決したのみである。

ついで天啓三年（1623 A.D.）琉球國王の奏請に顧みて「本國休養未久、暫擬五年一貢」と禮部覆奏し、當分五年一貢と決した。然るに天啓六年には早くも進貢し續いて七年復た入貢してゐる。爾後は『皇明實錄』存在せず、『明史』『明史彙編』の記載は頗る簡單で崇禎二年（1629 A.D.）及び四年の入貢を記し「自是迄崇禎末、並修貢如儀、後兩京繼沒、唐王立於福建、猶遣使奉貢、其虔事天朝、爲外藩最云」とあるのみである。『琉球國志略』によれば崇禎二、六、九、十二、十七年入貢し、十七年の貢使は道に阻まれて歸るを得なかつたとある。『球陽』によれば崇禎六年に二年一貢と定め貢船一隻を増したこととなつてゐるが入貢の一々の記載はない。崇禎十七年の貢使が清の世祖の朝廷に赴いたことは前述の如くである。

以上が正規の進貢の概略であるが、其他に天壽を賀する爲、敕詔賜予を謝する爲、登極を賀する爲、東宮冊立を賀する爲、襲封を謝する爲等種々の名目を設けて不時の進貢をしてゐる。

入貢の際の貢物は『大明會典』によれば、馬、刀、金銀酒海、金銀粉匣、瑪瑙、象牙、螺殼、海巴、擢子扇、泥金扇、生紅銅、錫、生熟夏布、牛皮、降香、木香、速香、丁香、檀香、黃熟香、蘇木、烏木、胡椒、硫黃、磨刀石であつた。『中山世鑑』に洪武五年察度が泰期を遣して進貢した時の貢物を記してあるが、降香、木香、速香を被絳香、木速香としたのみで他は全く同様である。降香、木香、速香は他にも記載あり、被絳香、木速香は誤と思はれる點がある。『中山世鑑』

は尙質王（順治五年—康熙七年在位）の時向象賢が撰したものである。或は會典の記載に據つたものであるかも知れない。<sup>⑧</sup>馬は土産らしく、洪武九年太祖の命によつて李浩が琉球より馬四十匹を購つて歸つたことがある。硫黃、螺殼、海巴、生熟夏布、磨刀石等も土産であらう。刀、扇等は恐らく日本産であらう。其他は南海産らしく思はれる。またこれら常貢は時代によつて變更あり、特別の貢物もあつたらしい。明朝に於ては織金文綺、紗羅、襲衣、綵幣等の賜物を與へて報いた。

進貢使は『琉球國進貢錄』には「進貢使北京へ上るは使者は親方・親雲上なり」とある。『皇明實錄』によれば使者の身分を明記せるものは王弟、結制（或は結致とも記す、掟即ち領主）典簿、王姪、王舅、通事、長史、正議大夫等である。『沖繩一千年史』には「正使は耳目官にて正三位、副使は正議大夫」とあるが、明朝後半期以後の成例と思はれる。これら進貢使に對して明朝に於ては宴を賜ひ、また文綺、綵幣等を賜與した。

① 「賜三十六姓」の事は『皇明實錄』萬曆三十五年九月己亥の條に琉球王の奏を載せて「以洪永間例、初賜閩人三十六姓、知書者授大夫長史、以爲貢謝之司、習航海者授通事總管、以爲指南之備」とあるのみで明確な時日はわからない。『明史』『明史纂』琉球傳には洪武二十九年冬の所に「中山遣使請賜冠帶、命禮部繪圖、令自製、其王固以請、乃賜之、并賜其臣下冠服、又嘉其修職勤、賜閩中舟工三十六戶、以便貢使往來」とある。『大明會典』は洪武二十五年の事とし、また『琉球入學見聞錄』『琉球國志略』等みな二十五年に繫け且つ同時に琉球使臣に冠服を賜つたとしてゐる。『球陽』二十五年の條には「王遣使入貢、時附疏言、通事程復・葉希尹二人、以寮官兼通事、往來進貢、服勞居多、乞賜職冠帶、使本國臣民有所仰示、以變土俗、太祖從之、更賜閩人三十六姓」とある。『皇明實錄』について冠帶賜與の事を見るに、洪武二十五年五月十日の條に「祭度表言、其通事程・葉二人、往來進貢、服勞居多、乞賜職加冠帶、使本國臣民有所景仰、以變番俗、從之」とある。然して洪武二十九年には三回琉球入貢の記載があるが何れも冠帶乃至閩人賜予の事を記していない。『皇明實錄』が何故

に冠帶賜與を記して閩人賜與を記さないか疑問があるが、閩人賜与の事は恐らく二十五年のことで『明史』『明史彙編』が二十九年の事としてゐるのは誤であらう。三十六姓を一時に賜つたか否かにも疑問の餘地がある。『皇明實錄』萬曆三十五年九月の記事には「洪永間例」とある。然し永樂間の閩人賜与の事は『皇明實錄』始め『明史』『球陽』等にも見えない。米倉氏のいはれる如く「洪武永樂間に二回に亘つて閩人各一八姓合計三十六姓を琉球に送つた」(史林二二の一福州の琉球館)と斷定することも無理であらう。また武藤長平氏のいはれる如く琉球が三十六島なるが故に三十六姓と言つたまでゝ事實は十姓以内が渡來したといふ事も勿論斷定し難い。

## ② 『中山世譜』『琉球入學見聞錄』

琉球館については米倉氏が『史林』第二十二卷第一號に於て「福州の琉球館」なる題目の下に詳説して居られる。『皇明實錄』永樂二年九月甲午の條に「上以海外諸番朝貢之使益多命於福建浙江廣東市舶提舉司各設驛以館之福建曰來遠浙江曰安遠浙江曰懷遠各置驛丞一員」とある。

## ④

『皇明實錄』成化十一年四月戊子の條に「通事蔡璋等還次福州殺人掠在(財)非法殊甚……追究肆惡之徒依法懲治自後定爲例二年一貢止許百人」とある。その強盜殺人事件は『球陽』には成化八年の條に「王舅武實具呈言王常遣人往滿刺加國收買貢物奈遭風壞船漂至廣東有司轉道福建願自備工料修船同回明憲宗許之武實等還次福州修船時其僮從人等殺人劫財」とある。然るに『皇明實錄』によれば武實等が「自備二料(工料)修船回國」を乞ひて許されたのは成化九年四月丁卯で『琉球國志略』亦武實の入貢を成化九年としてゐる。『明史』琉球傳によればこの殺人事件は成化十年となる。また『皇明實錄』成化十一年四月の禮部の覆奏に「去年福建守臣言琉球國使臣等併殺死懷安縣民」とある。要之、武實等が進貢使として任命されて琉球を發したのが成化八年で「自備工料修船同回」を許されたのが九年殺人強盜事件が十年、二年一貢の命が發せられたのが十一年といふことになるであらう。

## ⑤

『皇明實錄』萬曆四十年十一月乙巳の條に「禮部覆福建巡撫丁繼嗣奏謂琉球情形叵測宜絕之便但彼名爲進貢而我遽阻回則彼得爲辭恐非柔遠之體請諭彼國新經殘破當厚自繕聚候十年之後物力稍充然後復修貢職未晚見今貢物著巡撫衙門查係倭產者悉携歸國……」とあり、同十一月壬寅の條に「大學士葉向高言……臣聞琉球已爲倭併其來貢

者半倭倭人所貢、盔甲等亦倭物、蓋欲假此窺伺中國、心甚叵測……」また同七月己酉の條に「兵科等給事中李瓊等言……彼中山王者、豈其當虞劉之餘、囚縲甫釋、遽忘倭奴之威、遠慕中國之義、不待貢期、增其方物、以來王哉、其爲倭所指授明矣、以琉球之弱不足患矣、而爲倭所指授則足患……」とある。

⑥『中山世鑑』所載の洪武五年入貢時の貢物の中に南海產のものあるを理由として洪武以前より琉球の南海に通交せしを論證する説があるが、そののみを以てしては斷定し難い。

#### 四

以上琉球の明に對する冊封・進貢の概略であるが、翻つて琉球と日本との關係を簡單に述べることとする。日本の琉球に對する關係は源爲朝が舜天王の父であるといふが如き説話は論外として、嘉祿三年即ち安貞元年(1227 A.D.)十月十日附の惟宗忠義に與へられた讓狀に「可早領知越前國守護職島津庄内薩摩方地頭守護職并十二島地頭職<sup>中</sup>右人任亡父豐後守忠久朝臣讓狀、可安堵彼職之狀、所仰如件、以下」<sup>①</sup>とあり、此時以前已に惟宗氏(後の島津氏)が十二島地頭職に任ぜられてゐたことがわかる。然しこの十二島が果して今の所謂琉球を凡て含むや否やは疑問の餘地があるやうである。

應永二十一年(1414 A.D.)には琉球國中山王尙巴志が使を足利幕府に致したが、その際將軍義持が尙巴志に與へた復書に琉球の遣使を「入貢」と爲してゐる。<sup>②</sup>其後も屢々幕府に入貢してゐることは『通航一覽』等にも記されてゐる。ついで嘉吉元年(1441 A.D.)になると島津忠國は將軍義教より薩摩・大隅・日向の太守に任ぜられ、兼ねて琉球の守護に任命された。<sup>③</sup>『通航一覽』には『宮本當代記』『慶長年錄』によつて「先年より綾船と稱して毎歲薩摩に貢物を納ると記せしは此時よりの事なるべし」と記してゐる。また足利幕府は島津氏に一般琉球渡海船に島津氏の免許を要するといふ特權を與へてゐる。それが享徳二年(1453 A.D.)頃であつたであらうと



は小葉田氏の考證された所である。<sup>④</sup>

島津氏が地頭或は守護に任ぜられたことが一方的でなかつたか否かは遽に決し難く、また琉球の遣使が所謂進貢であつたか否かについても疑問の餘地があるが、とも角も義持の復書は全く附唐國に對する書式であり、足利幕府は琉球の遣使を入貢と爲して居り、應永二十一年以後も引續き入貢して居たといふのであるから少くとも幕府に於ては琉球を附唐國と見做し琉球亦これを承認してゐたと見ねばならない。琉球が足利幕府に對して從屬的な位置にあつたことは事實であらう。さりとて足利幕府が琉球に對して支配權を持つてゐたとは考へられず、島津氏亦支配的勢力を實際上有してゐたとは勿論思はれない。かゝる状態が暫らく續いて内に應仁の大亂に引續いて戰國時代となり、外に倭寇の跳梁するあつて一時日琉の關係は斷絶したらしい。

日琉兩國間の貿易は相當活潑であつたらしく、初め近畿地方との交易が盛で、それがやゝ衰へると九州方面特に薩摩との貿易が擡頭したとは諸家のいふ所である。

こゝに注目すべきことは琉球が日明兩國間に介在して兩國の仲介を爲したことである。應永二十六年(1430 A. D.)將軍義持が明使呂淵を却けて以來日明關係中絶した爲宣德七年柴山をして敕を齎して琉球に赴かしめ中山王尙巴志をして人を日本に送つて敕諭を幕府に致さしめんとした顛末は小葉田氏が詳述せられた所で、今單に『皇明實錄』の記事を抄記するに止める。即ち宣德七年一月丙戌の條に「上念卽位以來四方蕃國皆來朝貢、惟日本未至、遂命內官柴山、齎敕往琉球國、令中山王尙巴志、遣人齎往日本諭之」とある。また正統元年(1436 A. D.)琉球王の進貢使伍是堅が琉球國王尙巴志に賜つた詔及び白金綵幣と共に日本國王源義教に賜つたそれを齎回らしめられたことがある。日本國王源義教とはいふまでもなく足利第六代將軍義教である。また嘉靖四年(1525 A. D.)

六月には福建に於て騷擾を惹起した日本使臣を捕縛護送すべきを命じた敕諭を琉球使臣に齎回らしめて日本國王即ち足利將軍に轉輸せしめ居る。明朝より琉球を介して日本に交渉したのみならず、日本よりも琉球を通じて明朝に表文を記齎したことがある。即ち『皇明實錄』嘉靖九年三月甲辰の條に「琉球國王世子尙清遣陪臣蔡瀚齎方物馬進貢<sup>中</sup>瀚來經日本、日本國王源義晴因託齎表文<sup>下</sup>略」とある。

此の如き日本と琉球との關係は豊臣秀吉が天下を統一するや面目を改め、更に慶長十四年(1609 A.D.)に至つて一變した。既述の如く薩摩と琉球との間に或程度の貿易關係があつたことは已に足利時代より認められる所で、内外の事情によつて妨げられて衰へたとはいへ貿易が全く絶えたのではなかつた。殊に戰國時代に於て國力を充實する爲に薩摩が貿易の利を度外視したとは考へられない。天文年間に三宅和泉守國秀なる者が琉球を取らんとして島津氏に阻止されたこと、天正十九年(1591 A.D.)龜井茲矩が琉球征伐を秀吉に請ふた時島津義久等<sup>⑤</sup>が細川幽齋石田三成に就きて未然に之を停めんとしたこと等は島津氏がいはゞ既得權益を防護せんとしたものではなからうか。

豊臣秀吉は天正十六年(1588 A.D.)島津氏を介して琉球に歸屬すべきを命じ、尙寧は屢々督促を受けし後同十八年天龍寺の僧桃菴等を派して大阪に於て秀吉に謁せしめた。文祿元年(1592 A.D.)秀吉は島津義久に朱印狀を與へて琉球をその屬國としてゐる。蓋し秀吉は不可分の領土の一部とする心算であつたが、大明征略の野心の實現を前にして姑く舊態を認めたに過ぎないであらうとは池内博士のいはれた所である。この顛末は池内博士が「文祿戰役開始以前に於ける秀吉の對外的態度を論じて此戰役の發端に及ぶ」<sup>史學雜誌 四の七、九、十</sup>に詳論してをられる。慶長十一年(1606 A.D.)島津義久は貢職を怠れるを理由として琉球を伐たんことを徳川家康に請うて許さ

れた。十四年に至つて樺山權左衛門尉久高を總帥として、三千餘人を率ひ船百艘を以て琉球を伐たしめ、四月五日には首里城を陥れ王尙寧を擒とした。五月十四日には尙寧を伴ひ那霸通堂より乗船二十五日には薩摩山川に到着した。翌年島津家久は尙寧を伴ひ將軍に謁せしめた。翌十六年九月二十日尙寧は鹿兒島を發し十月二十日那霸に歸着して居る。此間の顛末は『沖繩一千年史』に詳しい。

島津氏の琉球征伐の原因は那邊にあつたか。三州平定して内訌は治まり、加ふるに國內を統一し基礎漸く固まつた徳川幕府を背景とし得ることゝなつた島津氏が勢力の擴大を圖るに至つたことは當然であらう。徳川氏も亦琉球を介して明との通交回復を圖る意志があつたやうで、そのことは慶長十八年尙寧歸國に際して明國に齎すべきものとして與へられた「琉球國王尙寧與大明福建軍門書略」慶長十八年家康の命を承けて島津氏が尙寧に與へた書狀等を引いて秋山氏の論斷された所である。今『皇明實錄』に見ゆる一二の記事を記して稍しく補足するに止める。萬曆四十年八月丁卯の條に「兵部言<sup>中</sup>略倭酋雲蘇等致其國王源秀忠之命、欲借朝鮮之道、通貢中國、三十八年閏三月薄我寧區壇頭、又兩遣僞使覘我虛實、今四十年琉球入貢者、夾雜倭奴、不服盤驗、見於福建所報、略數十年來倭所垂涎者貢耳、故既收琉球、復縱中山王歸國、以爲通貢之路、彼意我必不入倭之貢、而必不逆琉球之貢、<sup>下</sup>略」とあり、同年十一月壬寅の條の大學生葉向高の疏の中に「倭將明檄琉球、挾其代請互市」とある。琉球征伐の原因として秋山氏が「琉球が既に明とより多くの關係を結び日本を餘り問題としないことゝなつては日本としては勢ひ最後の手段によつてこの交渉を打開せざるを得ない」ことを島津氏が知つたから此事が起つたと言つてをられるのは如何であらう。頗る漠然とした言葉で困るが、日琉關係よりも明琉關係が一層緊密になつたといふ意味ならば私的交通はとも角國家間の交渉としてはもと／＼明琉關係の方が緊密であつたやうで、若し日琉の交

渉が少くなつたといふことならば秀吉以前が餘計さうであつたらう。此頃になつて明琉の交渉が緊密の度を増したといふ意味ならば、さういふことはなかつたやうである。とも角こんな風に考へるよりは島津氏としては領内が治まり國力が充實し有力な後援を得て更に大なる國力の擴大を目指して起したことで、徳川幕府が琉球を介して明との通交を回復しようといふ希望を持つたことも有力な一因となつたと考へる方が自然ではなからうか。それが謝名の策動<sup>⑦</sup>や琉球が來聘の禮を失したことを導火線として琉球征伐の舉となつたのであらう。

島津氏が更に大なる國力の發展を目的としてゐたといふことは即ち琉球を介して貿易の利を占めんとしたことである。それが爲には琉球を完全に自己の領土として自ら主權者として君臨することは明との交渉の上に面白くない結果を生ずる。こゝに琉球がその領土でその支配を受けてゐるといふことを島津氏が明に對して極力隱蔽した理由が存する。明は日本に對して好感を持つてゐなかつたこと勿論で、朝鮮乃至琉球を通じての日本の和好通商の要求を常に白眼視してゐたことは前記萬曆四十年の兵部の奏疏、大學士葉向高の言の中にも明らかに示されて居り、四十五年朝鮮國王李暉が秀忠の書を轉達した時も兵部は「倭夷譎詐、變幻耽々、未已其不一以信使往來之故、遂堅睦鄰之約、而寢啓疆之謀明矣」と言つて居る。従つて日本が直接明朝と交渉する事は望み難く、島津氏が明朝と交渉することは更に望がなかつた。故に明朝に於て己に明らかに察知してゐた如く琉球を通じて交渉するより外に方法はない譯である。

従つて島津氏としては鵜飼の如き方法を以て琉球をして明と交通せしめ、その得た利益を搾取するといふ手段をとつたのである。尙寧が捕虜となりながら賓客の待遇を以て優遇されたこともこの理由によるものであらう。

慶長十五年三月島津氏は臣を派して琉球の土地を検收せしめ、十六年八月尙寧にその領有すべき知行目録を與へ

租額を八萬九千八十六石と決定し五萬石を王の所得とし餘は諸士に配分した。然して毎年の貢納を芭蕉布三千端上布六千端、下布一萬端、唐苧千三百斤、綿三貫目、棕綱綑百房、縹綱百房、筵三千八百枚、牛皮三百枚と決めた。且つ國王及び重臣は神前に誓つて盟約書を提出し永々代々薩摩に對して毛頭疎意あるべからざることを約したといふ。ついで慶長十六年九月伊勢、比志島、町田、樺山等重臣連署の掟十五ヶ條を尙寧に與へ「薩州御下知之外唐へ誂物可被停止之事」「從往古由來有之人たりといふ共當時不立御用人に知行被遣間敷事」「從薩州御判形無之商人不可有許容事」「年貢其外之公物此中日本之奉行如置目可被致取納之事」「從琉球他國へ商船一切被遣間敷事」等の如きことより「押賣押買可被停止之事」の如き些事まで規定し違犯者は嚴罰すべきことを申渡して居る。

かくして琉球は全く薩摩の附庸の國となり、幕府も亦琉球を薩摩の領地と爲してその租額を島津氏の知行の中に算入し、琉球は徳川將軍の代替り毎に慶賀使節を派し琉球國王の更替に當つては將軍の命を島津氏より轉達されて然る後位を繼ぎ謝恩使を派遣することとなり、年々島津氏に對して貢物を納むることとなつた。

一方明に對する琉球の關係は慶長十四年九月十二日「支那交通のことは先規の如く取計ふべし」と島津氏は命じて居る。もとより島津氏の琉球征服が對明貿易の利を目的としたものである以上當然のことで、十六年尙寧に與へられた十五ヶ條の掟の第一條に「薩摩御下知之外唐へ誂物可被停止之事」第十三條に「從琉球他國へ商船一切被遣間敷事」と琉球の對外貿易を全く島津氏の統制の下においてしたのである。ついで慶長十八年六月には更に

一、琉球より渡唐之船春者二月下旬秋者九月中旬に可致出帆候及歸帆之事者可爲五月下旬候右之時節相違に於ては可致闕所候爲其奉行可被差遣之事

一、到其島自何土如何様之用所雖被申遣候爰元役人墨付無之義者一切許容有間敷之事

一、從他領其島へ渡海之船雖有之爰元御判形無之船は如前々御法度被請付間敷之事と命令してゐる。

此の如く島津氏は琉球の對外貿易を全くその統制の下におきながら、琉球が薩摩の支配下にある事を明朝に對して極力隱蔽しようとした。その爲琉球の日本化を避けんとして種々の法令を出してゐることは琉球の史料に屢々見ゆる所である。また冠船即ち冊封使の乗船渡來の際は前以て「墓所え卒都婆相立たう人見候而者可差障候間可致無用候」<sup>⑩</sup>といふが如き微細な點まで規定した規則を屢々出して日本との關係を隱さうとした。いふまでもなく日本との緊密な關係が明に知られて明琉關係の斷絶せんことを恐れたのである。

① 秋山謙藏「大名島津氏の成立と外國貿易」歴史學研究三の六、沖繩一千年史

② 小葉田淳 神戸市史第二輯「中世の兵庫と外國關係」

③ 沖繩一千年史

④ 小葉田淳「中世の兵庫と外國關係」

⑤ 前者は『島津國史』後者は『南聘紀考』にあり。この顛末は池内博士「文祿戰役開始以前における秀吉の對外的態度を論じて此戰役の發端に及ぶ」史學雜誌二四の七・九・十及び沖繩一千年史等に詳説してある。

⑥ 秋山謙藏「琉球征討以後に於ける島津氏の植民政策」史學八の三

⑦ 沖繩一千年史

⑧ 幣原坦博士の南島沿革史論に詳しい。

⑨ 秋山謙藏「琉球征討以後に於ける島津氏の植民政策」

⑩ 冠船日記 このことについては將來補足する心算である。

## 五

以上述べた所を概言して結論とする。洪武五年察度が太祖の招聘に應じて入貢し、その國王は明の冊封を受くこととなり、明の朝貢國たる關係が定まつた。何故に琉球は明の朝貢國となつたか。その主要な理由は貿易による經濟的利益の獲得に在つた（いふまでもなく朝貢國でなければ貿易は許されなかつた）。地域狹小にして地味瘦せ天然資源に乏しい琉球は國用の充足を海外に求めねばならなかつた。洪武五年以前より琉球が南海方面に發展し貿易の利潤を得て以て存立してゐたことは諸家の認むる所である。洪武二十三年進貢の方物の中に多量の胡椒、蘇木、乳香があるのは南海との通交を示すもので、洪熙以後暹羅、三佛齊、爪哇、滿刺加、蘇門答刺諸國との交易が頗る盛であつたことは『南海古陶窰』所收の歷代寶案によつて明らかに示されてゐる。支那との交易も洪武以前よりあつたであらうことは容易に想像される。洪武五年以來琉球は明と公然貿易し得ることとなつた譯である。永樂二年五月禮部尙書李至剛が禁令に背いて磁器を賣買せし山南王の使臣を罰すべきを奏請した時「遠方之人知求利而已、安知禁令」と爲して罰しなかつたことがあるが、これは使臣中の或者が正當な手段によらずして利を得んとしたので、或ひは個人的な漁利を示すに過ぎぬとしても、然かもかゝる事實があつたことは許された方法による漁利が最大限度に爲されてゐたであらうことを想像せしめる。成化十一年尙圓に與へし敕に「除國王正貢外、不得私附貨物等、途次擾累」とあるのも使臣等が私に貨物を携行して利を貪らんとしたことを物語る。成化十四年四月の禮部の上奏に「琉球國已准二年一貢、今其王尙圓既故、而其世子尙眞乃奏欲一年一貢、輒引先朝之事、妄以控制諸夷爲言、原其實情、不過欲圖市易而已」とある。明朝に於ても琉球進貢の目的の那邊にあるかを十分察知してゐた。降つて萬曆四十三年刑科給事中姜性は「琉球歸命中國、無歲不來、茲欽限十年一貢、貢以十年、則

衣物無資、是驅之倭也」と喝破してゐる。明朝に於ては一年一貢、二年一貢或は五年一貢と進貢の回数を制限して以て煩を避けんとしたに拘らず、琉球に於てはその度に執拗に進貢回数の増加を要請したこともその目的の貿易利潤の獲得にあつたと見るによつて諒解される。

琉球の日本に對する關係は秀吉が來聘を命じ尙寧が遣使入貢する以前は從屬的な色彩を帯びた關係が一時あつたとはいへ明瞭な政治的な關係はなかつたと思はれる。慶長の琉球征伐以來島津氏の支配を受くるに至つた。然かも一方明との關係は従前の如く維持し、こゝに兩屬の形態をとるに至つた。然かも此兩屬の關係は一時的のもの、或は一時屈して他日の雄飛に備へるといふが如きものでなく、頗る退嬰的な狀態の下に明治初期まで繼續された。

島津氏の琉球に對する態度は正に鵜飼の鵜匠の如く、琉球をして對明貿易を爲さしめその得た利潤を搾取してゐた。その爲には完全に征服して領土としながら殊更琉球をして明の朝貢國たるの關係を維持せしめ、極めて周到なる注意を以て自己と琉球との關係を隱蔽せんと努めたのである。明の琉球に對する態度に至つては他の朝貢國に對すると變りなく、恩惠的な態度を以てその威を誇つたに過ぎなかつた。然かも明末に至つては日本の脅威を感じたこと甚しく、琉球の背後に日本あるを恐れて貢期を延長した有様で、もとより日本の通交要求には應じなかつたのである。

以上極めて蕪雜ながら明と琉球との關係を概述してみた。もとより清と琉球との關係も必然的に結付けて考へねばならないが、それは他日に譲る。日本との關係は殊に粗雜であるが將來補正する心算で、諸賢の御叱正を請ふ次第である。